

蟲^{むし}
(江戸川乱歩)

はじめに

さて、今回の『蟲』(江戸川乱歩著)という作品であるが、この作品はそれほど世間に広く流布した作品ではないかも知れないが、その作品の内容は、次のようなものである。まず、主人公の榎木愛造という人は、両親から幾何の財産を受継いだ一人息子であり、当時二十七歳の私立大学を中途退学した独身の無職者であった。本来、非常に裕福であり自由な身の上でも遭ったが、榎木愛造は不幸にも、その境涯を樂しむことが出来ぬ世にも稀なる厭人病者であった。――或る日、愛造の友人池内光太郎という人は、彼の家を訪ねて、女優木下芙蓉の話をする。僕は最近、木下芙蓉という女優と近づきになったが、その本名は木下文子であり、ホラ、小学校時代僕等がよくいたずらをした、あの美しい優等生の女の子であり、確か僕らより三年下で、愛造の初恋の人でもあったのである。

そして、主人公愛造はその女優木下芙蓉と三度出逢う機会を得るが、最初は、男二人で芙蓉のサロメの劇を見た後、二人で料亭に入り、その後芙蓉もそこに現れて一緒に会食する事になるが、女優木下芙蓉は、いかにも愛造に気がある様に振る舞い、二度目も同じように振る舞い、そして、三度目は、芝居のはねる時間を待って、今度は愛造が芙蓉を自動車に誘い込み、彼女の手に自分の手を重ねるといつまでも高笑いされるのであった。やがて、愛造は「ストーリーカー」(尾行と立聞きと隙見の)生活に入るが、それは池内と芙蓉は実は深い恋人関係であり、頻繁に娼婦の場所での情事を重ねて行くが、愛造は、その隣部屋に忍び込んで彼らの言動を立聞き隙見している内に、愛造に気がある様に振る舞ったのは、実は彼らの悪質な悪ふざけであったということを知り、ある恐ろしい悪魔の計画を思い付くという様な内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年五月吉日(決定版)

如月翔悟

目次

はじめに

蟲

(江戸川乱歩)

- 一、 主人公の世にも稀なる嫌人癖とその日々の生活ぶり
- 二、 友人から女優木下芙蓉（本名文子）の話とその出逢い
- 三、 主人公愛造は女優木下芙蓉と三度出逢う機会を得る
- 四、 或日、恐ろしい犯罪をおかす機縁となる出来事に出遭う
- 五、 愛造は、「ストーリーカー」（尾行と立聞きと隙見の）生活に入る
- 六、 或日、悪魔が彼の耳元にある不気味な思いつきを囁き始める
- 七、 主人公愛造は、終にその悪魔の計画を実行に移すことになる
- 八、 家へと到着し、その芙蓉の死骸を土蔵の中にと運び入れる
- 九、 死骸の腐敗が始まり、慌てて腐敗防止の品を求めて出掛ける
- 十、 動脈から防腐剤を注入し、死骸の腐敗を遅らせようと試みる
- 十一、 死骸の死斑を彩色で粉飾しても腐敗の進行は止めようもなく
- 十二、 やがて食事に降りて来ぬ開かずの蔵の扉を開けて見ると……

※ 参考文献

蟲^{むし}
(江戸川乱歩)

一、主人公の世にも稀なる嫌人癖とその生活ぶり

この話は、榎木愛造と木下芙蓉との、あの運命的な再会から出発すべきであるが、それについては、先ず男主人公である榎木愛造の、いとも風変りな性格について、一言して置かねばならぬ。……

主人公の榎木愛造は、既に世を去った両親から、幾何の財産を受継いだ一人息子で、当時二十七歳の、私立大学中途退学者で、自身の無職者であった。ということは、あらゆる貧乏人、あらゆる家族所有者の、羨望の的である所の、此上もなく安易で自由な身の上を意味するのだが、榎木愛造は不幸にも、その境遇を楽しんで行くことが出来なかった。彼は世に類もあらぬ嫌人病者であったからである。

彼のこの病的な素質は、一体全体どこから来たものであるか、彼自身にも不明であったが、その徴候は、既に、彼の幼年時代に発見することが出来た。彼は人間の顔さえ見れば、何の理由もなく、眼に一杯涙が湧き上った。そして、その内気さを隠す為に、あらゆる天井を眺めたり、手の平を使って、誠に不様な恥かしい格好をしなければならなかった。隠そうとすればする程、それを相手に見られているかと思うと、一層おびたらしい涙がふくれ上って来て、遂には、「ワツ」と叫んで、氣違ひになつてしまふより、どうにもこうにも仕方がなくなる。といった感じであった。彼は肉親の父親に対しても、家の召使いに對しても、時とすると母親に對してさえ、この不可思議な羞恥を感じた。随つて彼は人間を避けた。人間が懐しい癖に、彼自身の恥ずべき性癖を恐れるが故に、人間を避けた。そして、薄暗い部屋の隅にうずくまつて、身のまわりに、積木のおもちゃなどで、可憐な城壁を築いて、独りで幼い即興詩を吟んでいる時、僅かに安易な氣持になれた。

年長じて、小学校という不可解な社会生活に入つて行かねばならなかった時、彼はどれ程か当惑し、恐怖を感じたことであろう。彼は誠に異様な小学生であった。母親に彼の厭人癖を悟られることが堪え難く恥しかったので、独りで学校へ行くことは行つたけれど、そこでの人間との戦いは実に無残なものであった。先生や同級生に物を言われても、涙ぐむ外に何の術をも知らなかったし、受持の先生が他級の先生と話をしている内に、榎木愛造という名前が洩れ聞えただけで、彼はもう涙ぐんでしまふ程であった。

中学、大学と進むに従つて、このいむべき病癖は、少しずつ薄らいでは行つたけれど、小学時代は全期間の三分の一は病氣をして、病後の養生にかこつけて学校を休んだし、中学時代には、一年の内半分程は仮病を使つて登校をせず、書齋をしめ切つて、家人の這入つて来ない様にして、そこで小説本と、荒唐無稽な幻想の中に、うつらうつらと日を暮らしていたものだし、大学時代には、進級試験を受ける時の外は、殆ど教室に這入つたことがなく、と言つて、他の学生の様に様々な遊びに耽るでもなく、自宅の書庫の、買い集めた異端の書物の塵に埋まつて、併し、それらの書物を読むというよりは、虫の食つた青表紙や、十八世紀の洋紙や皮表紙の匂いをかき、それらの醸し出す幻怪な大気の中で、益々嵩じて来た病的な空想に耽り、昼と夜との見境のない生活を続けていたものである。

その様な彼であったから、後に述べるたつた一人の友達を除いては、まるで友達というものになかったし、友達の無い程の彼に、恋人のあろう筈もなかった。人一倍優しい心を

持ちながら、彼に友達も恋人もなかったことを、何と説明したらよいのであろう。彼とても、友情や恋をあこがれぬではなかった。濃やかな友情や甘い恋の話を聞いたり読んだりした時には、若し自分もそんな境界であつたなら、どんなにか嬉しかろうと、羨まぬではなかった。だが、仮令彼の方で友愛なり恋なりを感じても、それを相手に通じるまでに、どうすることも出来ぬ障害物が、まるで壁の様に立ちはだかつていた。

柎木愛造には、彼以外の人間という人間が、例外なく意地悪に見えた。彼の方で懐しがつて近寄つて行くと、相手は忠臣蔵の師直の様に、ついとそっぽを向くかと思われた。中学生の時分、汽車や電車の中などで、二人連れの話し合っている様子を見て、屡々驚異を感じた。彼等の内一人が熱心に喋り出すと、相手の方は、さもさも冷淡な表情で、そっぽを向いて、窓の外の景色を眺めたりしている。時たま思い出した様に合点合点をするけれど、滅多に話手の顔を見はしない。そして、一方が黙ると、今度は冷淡な相手だつた方が、打つて變つて熱心な口調で話し出す。すると、前の話手は、ついとそっぽを向いて、俄かに冷淡になってしまう。それが人間の会話の常態であることを悟るまでに、彼は長い年月を要した程である。これは些細な一例でしかないけれど、総てこの例によって類推出来る様な人間の社交上の態度が、内気な彼を沈黙させるに充分であつた。彼は又、社交会話に洒落（彼によればその大部分が、不愉快な駄洒落でしかなかったが）というもの存在するのが、不思議で仕様がなかつた。洒落と意地悪とは同じ種類のものではあつた。彼は、彼が何かを喋っている時、相手の目が少しでも彼の目をそれて、外の事を考えていると悟ると、もうあとを喋る気がしない程、内気者であつた。言葉を換えて言うると、それ程彼は愛について貪婪（強欲）であつた。そして、余りに貪婪（強欲）であるが故に、彼は他人を愛することが、社交生活を営むことが出来なかつたのであるかも知れない。

だが、そればかりではなかつた。もう一つのものであつた。卑近な実例を上げるならば、彼は幼少の頃、女中の手を煩わさないで、自分で床を上げたりすると、その時分まだ生きていた祖母が、「オオ、いい子だいい子だ」と言つて御褒美を呉れたりしたものであるが、そうして褒められることが、身内が熱くなる程、恥しくて、いやでいやで、褒めてくれる相手に、極度の憎悪を感じたものである。引いては、愛することも、愛されることも、「愛」という文字そのものすらが、一面ではあこがれながらも、他の一面では、身体がキーツとねじれて来る程も、何とも形容し難いやあないやあな感じであつた。これは彼が、所謂自己嫌悪、肉親憎悪、人間憎悪等の一聯の特殊な感情を、多分に附与されていたことを語るものであるかも知れない。彼と彼以外の凡ての人間とは、まるで別種類の生物である様に思われて仕方がなかつた。この世界の人間共の、意地悪の癖に、あつかましくて、忘れっぽい陽気さが、彼には不思議でたまらなかつた。彼はこの世に於て、全く異国人であつた。彼は謂わば、どうかした拍子で、別の世界へ放り出された、たった一匹の、孤獨な陰獣でしかなかつた。

その様な彼が、どうしてあんなにも、死にもの狂いな恋を為し得たか。不思議と言えば不思議であるが、だが、考え方によつては、その様な彼であつたからこそ、あれ程の、物狂わしい、人外境の恋が出来たのだとも、言えないことはない。彼の恋にあつては、愛と憎悪とは、最早や別々のものではなかつたのだから。併し、それは後に語るべき事柄である。

幾何の財産を残して両親が相ついで死んだあとは、家族に対する見得や遠慮の爲めに、

苦痛をしのんで続けていた、ほんの僅かばかりの社会的な生活から、彼は完全に逃れることが出来た。それを簡単に言えば、彼は何の未練もなく私立大学を退校して、土地と家屋を売却し、予ねて目星をつけて置いた郊外の、淋しいあばら家へと引移ったのである。か様にして、彼は学校という社会から、又、隣近所という社会から、全く姿をくらましてしまふことが出来た。人間である以上は、どこへ移ったところで、全然社会を無視して生存することは出来ないのだけれど、柁木愛造が、最も厭ったのは、彼の名前なり為人を知っている、見知り越しの（互いに知っている）社会であったから、隣近所に一人も知り合いない、淋しい郊外へ移住したことは、その当座、彼に「人間社会を逃れて来た」という、やや安易な気持を与えたものである。

その郊外の家というのは、向島の吾妻橋から少し上流のKという町にあった。そこは近くに安待合や、貧民窟がかたまっている、河一つ越せば浅草公園という盛り場をひかえているにも拘らず、思いもかけぬ所に、広い草原があったり、ひよっこり釣堀の毀れかかった小屋が立っていたりする、妙に混雑と閑静とを混ぜ合わせた様な区域であったが、そのとある一廓に、このお話は大地震よりは余程以前のことだから、立ち腐れになった様な、化物屋敷同然の、だだっ広い屋敷があつて、柁木愛造は、いつか通りすがりに見つけておいて、それを借り受けたのであつた。

毀れた土塀や生垣で取まいた、雑草のしげるにまかせた広い庭の真中に、壁の落ちた大きな土蔵がひよっこり立っていて、その脇に、手広くはあるけれど、殆ど住むに耐えない程、荒れ古びた母屋があつた。だが、彼にとつては、母屋なんかはどうでもよかつたので、彼がこの化物屋敷に住む気になったのは、一つにその古めかしい土蔵の魅力によつてであつた。厚い壁でまぶしい日光をさえぎり、外界の音響を遮断した、樟脳臭い土蔵の中に、独りぼつちで住んでみたいというのは、彼の長年のあこがれであつた。丁度貴婦人が厚いヴェイルで彼女の顔を隠す様に、彼は土蔵の厚い壁で、彼自身の姿を、世間の視線から隠してしまいたかつたのである。

彼はその土蔵の二階に畳を敷きつめて、愛蔵の異端の古書や、横浜の古道具屋で手に入れた、等身大の木彫の仏像や、数個の青ざめたお能の面などを持込んで、そこに彼の不思議な檻を造りなした。北と南の二方だけに開かれた、たった二つの、小さな鉄棒をはめた窓が、凡ての光源であつたが、それを更らに陰気にする為に、彼は南の窓の鉄の扉を、ぴっしやりと締切ってしまった。それ故、その部屋には、年中一分の陽光さえも直射することはなかつた。これが彼の居間であり、書齋であり、寝室であつた。

階下は板張りのままにして、彼のあらゆる所有品を、祖先伝来の丹塗の長持や、紋章の様な錠前のつきたいかめしい筆筒や、虫の食った鏡櫃や、不用の書物をつめた本箱や、その他様々のがらくた道具を、滅茶苦茶に置き並べ積重ねた。

母屋の方は十畳の広間と、台所脇の四畳半との畳替えをして、前者を滅多に來ない客の爲の応接間に備え、後者は炊事に備った老婆の部屋に当てた。彼はそうして、客にも備へた婆さんにも、土蔵の入口にすら近寄せない用意をした。土蔵の出入口の、厚い土の扉には、内からも外からも錠を卸す仕掛けにして、彼がその二階にいる時は、内側から、外出の際は外側から、戸締りが出来る様になつていた。それは謂わば、怪談の明かすの部屋に類するものであつた。

備婆さんは、家主の世話で、殆ど理想に近い人が得られた。身寄りのない六十五歳の

年寄りであったが、耳が遠い外には、これという病氣もなく、至極まめめした、小綺麗な老人であった。何より有難いのは、そんな婆さんにも似合わず、楽天的な呑気者で、主人が何者であるか、彼が土蔵の中で何をしているか、という様なことを、猜疑し穿鑿しなかつたことである。彼女は所定の給金をきちんきちんと貰って、炊事の暇々には、草花をいじったり、念仏を唱えたりして、それですっきり満足している様に見えた。

言うまでもなく、榎木愛造は、その土蔵の二階の、昼だか夜だか分らない様な、薄暗い部屋で、彼の多くの時間を費した。赤茶けた古書の頁をめくって一日をつぶすこともあった。ひねもす部屋の中に仰臥して、仏像や壁にかけたお能の面を眺めながら、不可思議な幻想に耽ることもあった。そうしていると、いつともなく日が暮れて、頭の上の小さな窓の外の、黒天鷲絨の空に、お伽噺の様な星がまたたいていたりした。

暗くなると、彼は机の上の燭台に火をともし、夜更けまで読書をしたり、奇妙な感想文を書き綴ったりすることもあったが、多くの夜は、土蔵の入口に錠を卸して、どこもなくさまよい出るのがならわしになっていた。極端な人厭いの彼が、盛り場を歩き廻ることを好んだというのは、甚だ奇妙だけれど、彼は多くの夜、河一つ隔てた浅草公園に足を向けたものである。だが、人嫌いであつたからこそ、話しかけたり、じろじろと顔を眺めたりしない、漠然たる群集を、彼は一層愛したのであつたかも知れぬ。その様な群集は、彼にとつて、局外から觀賞すべき、絵や人形にしか過ぎなかつたし、又、夜の人波にもまれてゐることは、土蔵の中にいるよりも、却つて人目を避ける所以でもあつたのだから。人は、無関心な群集のただ中で、最も完全に彼自身を忘れることが出来た。群集こそ、彼にとつてこよなき隠れ簞であつた。そして、榎木愛造のこの群集好きは、あの芝居のはね時を狙つて、木戸口をあふれ出る群集に混つて歩くことによつて、僅かに夜更けの淋しさをまぎらしていた、ポオの Man of crowd の一種不可思議な心持とも、相通する所のものであつた。

さて、冒頭に述べた、榎木愛造と木下芙蓉との、運命的な邂逅というのは、この土蔵の家に引移つてから、二年目、彼がこの様な風変りな生活の中に、二十七歳の春を迎えて間もない頃、淀んだ生活の沼の中に、突然石を投じたように、彼の平静をかき乱した所の、一つの重大な出来事だったのである。

二、友人から女優木下芙蓉（文子）の話とその出逢い

先にも一寸触れて置いたが、かくも人厭いな榎木愛造にも、例外として、たった一人の友達があつた。それは、実業界に一寸名を知られた父の威光で、ある商事会社の支配人を勤めている、池内光太郎という、榎木と同年輩の青年紳士であつたが、あらゆる点が榎木とは正反対で、明るい、社交上手な、物事を深く掘下げて考えない代りには、末端の神経はかなりに鋭敏で、人好きのする、好男子であつた。彼は榎木と家も近く小学校も同じだつた関係で、幼少の頃から知合いであつたが、お互が青年期に達した時分、榎木の不可思議な思想なり言動なりを、それが彼にはよく分らないだけに、すっかり買いかぶつてしまつて、それ以来引続き、榎木の様な哲学者めいた友達を持つことを、一種の見得にさえ感じて、榎木の方では寧ろ避ける様にしていたにも拘らず、繁々と彼を訪ねては、少しばかり見当違いな議論を吹きかけることを楽しんでいたのである。また、華やかな社交に

慣れた彼にとっては、柎木の陰気な書齋や、柎木の人間そのものが、こよなき休息所であり、オアシスでもあったのだ。

その池内光太郎が、ある日、柎木の家の十畳の客間で、(柎木はこの唯一の友達をさえ、土蔵の中へ入れなかつた)柎木を相手に、彼の華やかな生活の一断面を吹聴している内に、ふと次の様なことを言い出したのである。「僕は最近、木下芙蓉って言う女優と近づきになったがね。一寸美しい女なんだよ」と彼はそこで一種の微笑を浮べて、柎木の顔を見た。それはここに言う「近づき」とは、文字のままの「近づき」でないことを意味するものであつた。「まあ聞き給え、この話は君にとつても一寸興味があり相なんだから。と言うのは、その木下芙蓉の本名が木下文子なんだ。君、思い出さないかい。ホラ、小学校時代僕等がよくいたずらをした、あの美しい優等生の女の子さ。たしか、僕達より三年ばかり下の級だつたが……」。

そこまで聞くと、柎木愛造は、ハツとして、俄かに顔がほてつて来るのを感じた。流石に彼とても、二十七歳の今日では、久しく忘れていた赤面であつたが、ああ赤面しているなどと思うと、丁度子供の時分、涙を隠そうとすればする程、一層涙ぐんで来たのと同じに、それを意識する程、益々目の下が熱くなつてくるのをどうすることも出来なかつた。「そんな子がいたかなあ。だが、僕は君みたいに早熟でなかつたから」。

彼はてれ隠しに、こんなことを言つた。だが、幸なことに、部屋が薄暗かつたせいとか、相手は、彼の赤面には気づかぬらしく、やや不服な調子で、「いや、知らない筈はないよ。学校中で評判の美少女だつたから。久しく君と芝居を見ないが、どうだい、近い内に一度木下芙蓉を見ようじゃないか。幼顔そのままだから、君だつて見れば思い出すに違いないよ」と、如何にも木下芙蓉との親交が得意らしいのである。

芙蓉の芸名では知らなかつたけれど、言うまでもなく、柎木愛造は、木下文子の幼顔を記憶していた。彼女については、彼が赤面したのも決して無理ではない程の実に恥しい思出があつたのである。

彼の少年時代は、先にも述べた通り、極度に内気な、はにかみ屋の子供であつたけれど、彼の言う様に早熟でなかつた訳でなく、同じ学校の女生徒に、幼いあこがれを抱くことも人一倍であつた。そして、彼が四年級の時分から、当時の高等小学の三年級までも、ひそかに思いこがれた女生徒というのが、外ならぬ木下文子だつたのである。と言つても、例えば池内光太郎の様に、彼女の通学の途中を擁して、お下げのリボンを引きちぎり、彼女の美しい泣き顔を樂しむなどと言う、すばらしい芸当は、思いも及ばなかつたので、風を引いて学校を休んでいる時など、発熱の為にドンヨリとうるんだ脳の中を、文字の笑顔ばかりにして、熱っぽい小さな腕に、彼自身の胸を抱きしめながら、ホッと溜息をつく位が、関の山であつた。

ある時、彼の幼い恋にとつて、誠に奇妙な機会が恵まれたことがある。それは、当時の高等小学二年級の時分で、同級の餓鬼大将の、口髯の目立つ様な大柄な少年から、木下文子に(彼女は尋常部の三年生であつた)附文をするのでから、その代筆をしると命じられたのである。彼は勿論級中第一の弱虫であつたから、この腕白少年にはもうビクビクしていたもので、「一寸こい」と肩を掴まれた時には、例の目に涙を一杯浮べてしまつた程で、其命令には、一も二もなく応じる外はなかつた。彼はこの迷惑な代筆のことで胸を一杯にして、学校から帰ると、お八つもたべないで、一間にとじ籠り、机の上に巻紙をのべ、生れ

て初めての恋文の文案に、ひどく頭を悩ましたものである。だが、若い文章を一行二行と書いて行くに従って、彼に不思議な考が湧上って来た。「これを彼女に手渡す本人はかの腕白少年であるけれど、書いているのは正しく私だ。私はこの代筆によって、私自身の本当の心持を書くことが出来る。あの娘は私の書いた恋文を読んでくれるのだ。仮令先方では気づかなくても、私は今、あの娘の美しい幻を描きながら、この巻紙の上に、思いのたけを打あけることが出来るのだ」この考が彼を夢中にしてしまった。彼は長い時間を費して、巻紙の上に涙をさえこぼしながら、あらゆる思いを書き記した。腕白少年は翌日そのかさばった恋文を、木下文字に渡したが、それは恐らく文字の母親の手で焼き捨てられでもしたのである。其後快活な文字のそぶりにさしたる変りも見えず、腕白少年の方でも、いつかけろりと忘れてしまった様子であった。ただ、代筆者の柎木少年だけが、いつまでも、クヨクヨと、甲斐なく打捨てられた恋文のことを、思いつづけていたのである。

又、それから間もなく、こんなこともあった。恋文の代筆が彼の思いを一層つのらせたのである。余りに堪え難い日が続いたので、彼は誠に幼い一策を案じ、人目のない折を見定めて、ソツと文字の教室に忍び込み、文字の机の上げ蓋を開いて、そこに入れてあった筆入れから、一番ちびた、殆ど用にも立たぬ様な、短い鉛筆を一本盗み取り、大事に家へ持帰ると、彼の所有になつていた小筆筒の開きの中を、綺麗に清め、今の鉛筆を半紙に包んで、まるで神様でもある様に、その奥の所へ祭って置いて、淋しくなると彼は、開き戸をあけて、彼の神様を拜んでいた。その当時、木下文字は、彼にとつて神様以下のものではなかつたのである。

その後文字の方でもどこかへ引越して行つたし、彼の方でも学校が変わつたので、いつか、忘れるともなく忘れてしまつていたのだが、今池内光太郎から、木下文字の現在を聞かされて、相手は少しも知らぬ事柄ではあつたけれど、そのような昔の恥かしい思い出に、彼は思わず赤面してしまつたのであつた。

雑沓中の孤独といった気持の好きな、柎木の様な種類の厭人病者は、浅草公園の群集と同じに汽車や電車の中の群集、劇場の群集などを、寧ろ好むものであつたから、彼は芝居のことも世間並には心得ていたが、木下芙蓉と言へば、以前は影の薄い場末の女優でしかなかつたのが、最近ある人気俳優の新劇の一座に加わつてから、グツと売出して、立女形ではないけれど、顔と身体の圧倒的な美しさが、特殊の人気を呼んで、一座の女優中でも、二番目ぐらいには羽振りのよい名前になつていた。柎木は、かけ違つて、まだ彼女の舞台を見てはいなかつたが、彼女についてこの程度の智識は持つていた。

その人気女優が、昔々の幼い恋の相手であつたと分ると、厭人病者の彼も、少しばかり浮々として、彼女が懐かしいものに思われて来るのであつた。それが今では、池内光太郎の恋人であろうとも、どうせ彼には出来ない恋なのだから、一目彼女の舞台姿を見て、一寸女々しい気持になるのも、悪くないなど感じたのである。

彼等がK劇場の舞台で、木下芙蓉を見たのは、それから三四日の後であつたが、柎木愛造に取つては、誠に幸か不幸か、それは丁度立女形の女優が病氣欠勤をして、その持役のサロメを、木下芙蓉が代演している際であつた。

二匹の鯛が向き合っている様な形をした、非常に特徴のある大きな目や、鼻の下が人の半分も短くて、その下に、絶えず打震えている、やや上方にまくれ上つた、西洋人の様に自在な曲線の唇や、殊にそれが、婉然と微笑んだ時の、忘れ難き魅力に至るまで、その昔

の佛おまかげをそのまま留とどめてはいたけれど、十幾年の歲月は、可憐なお下げの小学生を、恐ろしい程豊麗ほうれいな全き女性に変えてしまったと同時に、その昔の無邪気な天使を、柁木まさきの神様でさえあつた聖なる乙女おとめを、いつしか、妖艶たぐい比ひもあらぬ魔女と変じていたのである。

柁木愛造は、輝くばかりの彼女の舞台姿に、最初の程は、恐怖に近い圧迫を感じるばかりであつたが、それが驚異となり、憧憬あこがれとなり、遂ついに限りなき眷恋けんれんと変じて行つた。大人の柁木まさきが大人の文字ふみこを眺める目は、最早もはや昔の様に聖なるものではなかつた。彼は心に恥じながらも、知らず識しらず舞台の文字けがを汚けがしていた。彼女の幻を愛撫し、彼女の幻を抱き、彼女の幻を打擲ちやくやく（殴打おうた）した。それは、隣席の池内光太郎が彼の耳に口をつけて、囁ささやき声で、芙蓉の舞台姿に、野卑やひな品評を加え続けていたことが、彼に不思議な影響を与えたのであつたけれど。

サロメが最終の幕だつたので、それが済むと、彼等は劇場を出て、迎への自動車に這入つたが、池内いけうちは独り心得顔に、その近くのある料理屋の名を、運転手に指図した。柁木愛造は池内の下心を悟つたけれど、一度芙蓉の素顔が見たくもあつたし、サロメの幻に圧倒されて、夢うつつの気持だつたので、強いて反対を唱えもしなかつた。

彼等が料理屋の広い座敷で、上の空な劇評などを交かわしている内、案あんの定じよう、そこへ和服姿の木下芙蓉が案内されて来た。彼女は襖ふすまの外うへに立つて、池内いけうちの見上げた顔に、ニコリと笑いかけたが、ふと柁木まさきの姿を見ると、作つた様な不審顔になつて、目で池内いけうちの説明を求めるのであつた。

「木下さん。この方を覚えてませんか」と、池内いけうちは意地悪な微笑を浮べて言つた。すると、「エエ」と答えて、彼女はまじまじした。「柁木さん。僕の友達。いつか噂うわさをしたことがあつたでしょう。僕の小学校の同級生で、君を大変好きだつた人なんです」、「マア、私、思い出しましたわ。覚えてますわ。やっぱり幼顔わらわつて、残っているものでございますわね。柁木さん、本当にお久しぶりでございました。わたくし、変りましたでしょう」。

そう言つて、叮嚀ていねいなおじぎをした時の、文字の巧みな嬌わたくし差を、柁木まさきはいつまでも忘れることが出来なかつた。「学校中での秀才でいらつしやいましたのを、私、覚えておりますわ、池内いけうちさんは、よくいじめられたり、泣かされたりしたので覚えてますし」、彼女がそんなことを言い出した時分には、柁木まさきはもう、すっかり圧倒された気持であつた。池内いけうちすら彼女の敵ではない様に見えた。

小学校時代の思出話おもいでが劇談に移つて行つた。池内いけうちは酒を飲んで、雄弁に彼の劇通げきつうを披瀝ひれきした。彼の議論は誠に雄弁であり、気が利いてもいたが、併し、それはやっぱり、彼の哲学論と同じに、少しばかり上うわすべに上うわすべりであることを免まぬかれなかつた。木下芙蓉も、少し酔つて、要所所で柁木まさきの方に目まぜをしながら、池内いけうちの議論を反駁はんぱくしたりした。彼女にも、劇論では、柁木まさきの方が（通ではなかつたけれど）本物でもあり、深くもあることが分つた様子で、池内いけうちには揶揄やゆをむくいながら、彼には教えを受ける態度を取つた。お人よしの柁木まさきは、彼女の意外な好意が嬉しくて、いつになく多弁に喋つた。彼の物の言い方は、芙蓉ふようには少し難し過ぎる部分が多かつたけれど、彼の議論に油がのつてきた時には、彼女はじつと話手の目を見つめて、讚嘆さんたんに近い表情をさえ示しながら、彼の話はなに聞き入るのであつた。「これを御縁ごえんに、御ひいきを御願ごがんいしますわ。そして、時々、教えて頂き度たいと思ひますわ」——別れる時に、芙蓉ふようは真面目な調子で、そんなことを言つた。それが満更まんざら御世辞ごせじでない様に見えたのである。

池内いけうちにあてられることであろうと、いささか迷惑まじまじに思っていたこの会合が、案外にも、却かえりって池内いけうちの方で嫉妬しつとを感じなければならぬ様な結果となった。芙蓉ふようが女優稼業あひまにも似げなく、どこか古風こふうな思索しよく的な傾向けいこうを持つていたことは、寧ろ意外いがいで、彼女が一層好このしいものに思われた。柁木まきぎは帰りの電車でんしゃの中で、「学校中がっこうちゆうでも秀才しゆうさいでいらっしやいましたのを、私わたし、覚えて居りますわ」と言った彼女の言葉を、子供こどもらしく、心の内で繰返くりかえしていた。

三、主人公愛造あいぞうは女優木下芙蓉ふようと三度出逢であう機会を得る

それ以来、世間に知られている所では、柁木愛造まきぎが木下芙蓉ふようを殺害ころしたまでの、半年ばかりの間に、この二人はたった三度さんど（しかも最初の一ヶ月の間に三度だけ）しか会っていない。つまり、芙蓉殺害事件ふようころしがいけんは、彼等が最後に会った日から、五ヶ月の間を置いて、彼等が相互たがひの存在そんざいを已すでに忘れてしまったと思われる時分に、誠に突然とつぜんに起つたものである。これは何となく信じ難い、変てこな事実であった。空漠くうぼくたる五ヶ月間が、犯罪動機はんみどうきと犯罪そのものとの連鎖れんさを、ブツツリ断ち切つていた。それなればこそ、柁木愛造まきぎは、兇行後げんぎょうご、あんなにも長い間、警察の目を逃れていることが出来たのである。

だが、これは頭あたまわれたる事実じじつでしかなかった。実際は、彼は、いとも奇怪なる方法によつてではあつたが、その五ヶ月の間も、五日に一度位の割合で、繁々はんはんと芙蓉ふように会つていた。そして、彼の殺意ころしは、彼にとつては誠に自然な経路けいじゆを踏んで、成長して行つたのである。

木下芙蓉ふようは彼の幼い初恋こっしんの女であつた。彼のフェティシズムが、彼女の持物を神と祭つた程の相手であつた。しかも、十幾年ぶりの再会で、彼は彼女のくらくらめくばかり妖艶あやげんな舞姿ぶしを見せつけられたのである。その上、その昔の恋人が、当時は口を利いた事のなかつた彼女が、優しい目で彼を見、微笑わいごうみかけ、彼の思想を畏敬おそし崇拜たいていするかにさえ見えたのである。あれ程の厭人えんじん的な憶病者おくびやうしやの柁木愛造まきぎではあつたが、流石りうじきにこの魅力に打勝つことは出来なかつた。外の女からの様に、彼女から逃避する力はなかつた。彼が彼女に恋を打開けるまでには、たった三度の対面で充分だつたことが、よくそれを語っている。

三度とも、場所は變つていたけれど、彼等は最初と同じ三人で、御飯をたべながら話をした。引張り出すのは無論池内いけうちで、柁木まきぎはいつもお相伴しやうばんといつた形であつたが、併し、芙蓉ふようがその都度つど快く招待に応じたのは、柁木まきぎに興味を感じていたからだ、彼はひそかに自惚うぬほれていた。池内いけうちが気の毒にさえ思われた。芙蓉ふようは、池内いけうちに対しては、普通の人気女優らしい態度で、意地悪いぢあくでもあれば、たかぶつても見せた。相手を翻弄ほんろうする様な口も利いた。その様子を見ていると、彼女は柁木まきぎの一番苦手な、恐怖すべき女でしかなかったが、それが柁木まきぎに対する時は、ガラリと態度が變つて、芸術の使徒ししたととしての一俳優いちあひまといった感じになり、真面目まじめに、彼の意見を傾聴けいしやうするのであつた。そして、会うことが度重たびかさなる程、彼女のこの静かなる親愛しんあいの情は、濃こまやかになつて行くかと思われた。

だが、気の毒な柁木まきぎは、実は大変な誤解ごかいをしていたのだ。芙蓉ふようの様な種類の女性は、二つ面の仁和賀にわがと同じ様に、二つも三つもの、全く違つた性格を貯たくわえていて、時に応じ人に応じて、それを見事に使い別けるものだということを、彼はすっかり忘れていた。彼女の好意は、実は男友達の池内光太郎いけうちみつたろうが彼に示した好意と同じもので、彼の、古風こふうな小説にでもあり相あひな、陰鬱いんうつな、思索しよく的な性格を面白がり、優れた芸術上の批判力をめで、ただ気の置けない話相手として、親愛しんあいを示したに過ぎないことを、彼は少しも気づかなかつた。彼

は自惚れの余り、池内の立場を憐みさえしたけれど、反対に池内の方でこそ、彼をあざ笑っていたのである。

池内の最初の考えでは、愛すべき木念仁の友達に、彼自身の新しい愛人を見せびらかして、一寸ばかり罪の深い楽しみを味わって見ようとしたままで、その御用が済んでしまえば、そんな第三者は、もう邪魔なばかりであった。それに、彼は、榎木の小学時代の恥かしい所業については知る所がなかったけれど、近頃の榎木の様子も、妙に熱っぽく見えて来たのも、いささか気掛りであった。彼はこの辺が切上げ時だと思った。

三度目に会った時、次の日曜日は丁度月末で、芙蓉の身体に隙があるから、三人で鎌倉へ出かけようと、約束をして別れたので、榎木はその日落合う場所の通知が、今来るか今来るかと、待ち構えていても、どうした訳か、池内からハガキ一本来ないので、待兼ねて問合わせの手紙まで出したのだが、それにも何の返事もなく、約束の日曜日は、いつの間にか過去ってしまった。池内と芙蓉との間柄が、単なる知合い以上のものであることは、榎木も大方は推察していたので、若しかしたら、池内の奴、やきもちをやいているのではないかと、やっぱり自惚れて考えて、才子で好男子の池内に、それ程嫉妬をされているかと思うと、彼は寧ろ得意をさえ感じたのである。

だが、池内という仲立ちにそむかれては、手も足も出ない彼であったから、そうして、芙蓉と会わぬ日が長引くに従って、耐え難き焦燥を感じないではいられなかった。三日に一度は、三階席の群集に隠れて、ソツと彼女の舞台姿を見に行っていたけれど、そんなことは、寧ろ焦慮を増しこそすれ、彼の烈しい恋にとつて、何の慰めにもならなかった。彼は多くの日、例の土蔵の二階へと籠って、ひねもす、夜もすがら、木下芙蓉の幻を描き暮した。目をふさぐと、まぶたの裏の暗闇の中に、彼女の様々な姿が、大寫しになって、悩ましくも蠢くのだ。小学時代の、天女の様に清純な笑顔にダブツて、半裸体のサロメの嬌笑が浮き出すかと思うと、金色の乳覆いで蓋をした、サロメの雄大な胸が、波の様に息吐いたり、鬚のはいったたくましい二の腕が、まぶた一杯に蛇の踊りを踊ったり、それらの、おさえつける様な、凶暴な姿態に混って、大柄な和服姿の彼女が、張り切った縮緬の膝をすりよせて、じつと上目に見つめながら、彼の話を聞いている、いとしい姿が、色々な角度で、身体のあらゆる隅々が大寫しになって、彼の心をかき乱すのであった。考えることも、読むことも、書くことも、全く不可能であった。薄暗い部屋の隅に立っている、木彫りの菩薩像さえが、ややともしれば、悩ましい聯想の種となった。

ある晩、あまりに堪え難かったので、彼は思い切って、兼ねて考えていたことを、実行して見る気になった。陰獣の癖に、彼は少しばかりお洒落だったので、いつも外出する時はそうしていたのだが、その晩も、婆やに風呂を焚かせ、身だしなみをして、洋服に着かえると、吾妻橋の袂から自動車を備って、その時芙蓉の出勤していた、S劇場へと向ったのである。

予め計ってあったので、車が劇場の楽屋口に着いたのは、丁度芝居のはねる時間であったが、彼は運転手に待っている様に命じて置いて、車を降りると、楽屋口の階段の傍に立って、俳優達が化粧を落して出て来るのを、辛抱強く待構えた。彼は嘗て、池内と一緒に、同じ様な方法で、芙蓉を誘い出したことがあったので、大体様子を呑み込んでいたのである。

その附近には、俳優の素顔を見ようとすると、町の娘共に混って、意気な洋服姿の不良ら

しい青年達がブラブラしていたし、中には柎木まさきよりも年長に見える紳士が、彼と同じ様に自動車を持たせて、そつと楽屋口を覗いているのも見受けられた。

恥しさを我慢して、三十分も待った頃、やつと芙蓉の洋服姿が階段を降りて来るのが見えた。彼は跪つまずきながら、慌ててその傍へ寄つて行つた。そして、彼が口の中で木下さんと言ふか言わぬに、非常に間の悪いことには、丁度その時、違う方角から近寄つて来た一人の紳士が、物慣れた様子で芙蓉に話しかけてしまったのである。柎木はのろまな子供の様に赤面して、引返す勇氣さえなく、ぼんやりと二人の立話を眺めていた。紳士は待たせてある自動車を指して、しきりと彼女を誘つていた。知合いと見えて、芙蓉は快くその誘いに応じて、車の方へ歩きかけたが、その時やつと、彼女のあの特徴のある大きな目が、柎木の姿を発見したのである。

「アラ、柎木さんじゃありませんの」と、彼女の方で声をかけてくれたので、柎木は救われた思いがした。「エエ、通り合わせたので、お送りしようかと思つて」、「マア、そうでしたの。では、お願い致しますわ。私丁度一度御目にかかりたくつていたのよ」。

彼女は先口の紳士を無視して、さも慣れ慣れしい口を利いた。そして、その紳士にあつさり詫言を残したまま、柎木に何かと話しかけながら、彼の車に乗ってしまったのである。柎木は、このはれがましい彼女の好意に、嬉しいよりは、面喰つて、運転手に予ねて聞知つた芙蓉の住所を告げるのも、しどろもどろであつた。「池内さんたら、この前の日曜日の御約束をフイにしてしまつて、ひどごさんすわ。それとも、あなたにお差支さしつかえがありましたの」、車が動き出すと、その震動につれて、彼の身近く寄り添いながら、彼女は話題を見つげ出した。彼女は其後も池内と三日にあげず、会つていたのだから、これは無論御世辞に過ぎなかつた。柎木は、芙蓉の身体の暖い触感に、ビクビクしながら、差支さしつかえのあつたのは、池内の方だろうと答えると、彼女は、では、今月の末こそは、是非どこかへ参りましょう。などと言つた。

彼等が一寸話題を失つて、ただ触覚だけで感じ合つていた時、俄に車内が明るくなった。車が、街燈やシヨウインドウでまぶしいほど明るい、ある大通りにさしかかつたのである。すると、芙蓉は小声で「マア、まぶしい」と呟つぶやきながら、大胆にも自分の側の窓のシェードを卸して、柎木にも、外の窓の卸してくれる様に頼むのであつた。これは別の意味があつた訳ではなく、女優稼業の彼女は、人目がうるさくて、一人の時でもシェードを卸しつけていた位だから、まして男と二人で乗っている際、ただ、その用心に目かくしをしたまでであつた。同時にそれは、彼女が柎木という男性にたかたくを括くくつていた印でもあつたのだ。

だが、柎木の方では、それをまるで違つた意味に曲解しないではいられたなかつた。彼はおろかにも、それを彼女が態と作つてくれた機会だと思ひ込んでしまつたのである。彼は震えながら、凡てのシェードを卸した。そして、彼はたつぷり一時間もたつたかと思われた程長い間、正面を向いたまま、身動きもしないでいた。

「もうあけても、いいわ」と車が暗い町に這入つたので、芙蓉の方では気兼ねの意味で、こう言つたのだが、その声が柎木を勇氣づける結果となつた。彼はビクツと身震いをして、黙つたまま、彼女の膝の上の手に、彼自身の手を重ねた。そして、段々力をこめながらそれを押えつけて行つた。

芙蓉はその意味を悟ると、何も言わないで、巧みに彼の手をすり抜けて、クシヨンの片

隅へ身を避けた。そして、柎木まさきの木彫りの様にこわばった表情を、まじまじと眺めていたが、ややあつて、意外にも、彼女は突然笑い出した。しかも、それは、プツと吹き出す様な笑いであつた。

柎木まさきは一生涯、あんな長い笑いを経験したことがなかつた。彼女はいつまでもいつまでも、さもおかし相に笑い続けていた。だが、彼女が笑つただけなれば、まだ忍べた。最もいけないのは、彼女の笑いにつれて柎木まさき自身が笑つたことである。ああ、それが如何に唾棄だき（吐き捨てる）べき笑いであつたか。若し彼がああ恥かしい仕事しごとを冗談にまぎらしてしまふ積りだつたとしても、その方が、猶なほ一層恥かしい事ではないか。彼は彼自身のお人好しに身震いしないではいられたなかつた。それが彼を撃つた烈しさは、後に彼がああ恐ろしい殺人罪を犯すに至つた、最初の動機が、実にこの笑いにあつたと言つても差支ない程であつた。

四、或日、恐ろしい犯罪をおかす機縁となる出来事に出遭う

それ以来数日の間、柎木まさきは何を考ふる力もなく、茫然として蔵の二階に坐つていた。彼と彼以外の人間の間に、打破り難い厚い壁のあることが、一層痛切に感じられた。人間憎悪の感情が、吐き氣の様にこみ上げて来た。

彼はあらゆる女性の代表者として、木下芙蓉を、此上憎み様がない程憎んだ。だが、何という不思議な心の働きであつたか、彼は芙蓉を極度に憎悪しながらも、一方では、少年時代の幼い恋の思出を忘れることが出来なかつた。又、成熟した彼女の、目や脣くちびるや全身の醸し出す魅力かちを、思い出すまいとしても思い出した。明かに、彼は猶なほお木下芙蓉を恋していた。しかもその恋は、あの破綻はたんの日以来、一層その熱度を増したかとさえ思われたのである。今や烈しき恋と、深い憎みとは、一つのものであつた。とは言え、若し今後彼が芙蓉と目を見交かわす様な場合が起つたならば、彼はいたたまらぬ程の恥と憎悪とを感じるであらう。彼は決して再び彼女と会おうとは思わなかつた。そして、それにも拘かわらず、彼は彼女を熱烈に恋していたのである。あくまでも彼女が所有したかつたのである。

それ程の憎悪を抱きながらやがて、彼がこつそりと三等席に隠れて、芙蓉の芝居を見に行き出したというのは、一見誠に変なことではあつたが、厭人病者の常として、他人に自分の姿を見られたり、言葉を聞かれたりすることを、極度に恐れる反面には、人の見えない所や、仮令たとへ見えていても、彼の存在が注意を惹かぬような場所（例えば公園の群集の中）では、彼は普通人の幾層倍も、大胆に放肆ほうし（わがまま）にふるまうものである。柎木まさきが土蔵の中にとじ籠こもつて、他人を近寄せないというのも、一つには彼はそこで、人の前では押えつけていた、自儘じまな所業を、ほしいままに振舞いたいが為であつた。そして厭人病者の、この秘密好みの性質には、兇悪なる犯罪人のそれと、どこかしら似通にかよつたものを含んでいゝるのだが、それは兎も角、柎木まさきが芙蓉を憎みながら、彼女の芝居を見に行つた心持も、やっぱりこれで、彼の憎悪というのは、その相手と顔を見合させた時、彼自身の方で恥かしさに吐き氣を催す様な、一種異様の心持を意味したのだから、芝居小屋の大入場おおいりばから、相手に見られる心配なく、相手を眺めてやるという事は、決して彼の所謂憎悪と矛盾するものではなかつたのである。

だが、一方彼の烈しい恋慕の情は、芙蓉の舞台姿を見た位で、いやされる訳はなく、そ

うして彼女を眺めれば眺める程、彼の満たされぬ欲望は、いやましに、深く烈しくなつて行くのであった。

さて、そうしたある日のこと、柎木愛造をして、愈々恐ろしい犯罪を決心させるに至つた所の、重大なる機縁となるべき、一つの出来事が起つた。それは、やっぱり彼が劇場へ芙蓉の芝居を見に行った帰りがけのことであるが、芝居がはねて、木戸口を出た彼は、嘗つての夜の思出に刺戟されたのであつたか、ふと芙蓉の素顔が垣間見たくなつたので、闇と群集にまぎれて、ソツと楽屋口の方へ廻つて見たのである。

建物の角を曲つて、楽屋口の階段の見通せる所へ、ヒヨイと出た時である。彼は意外なものを発見して、再び建物の蔭に身を隠さねばならなかつた。というのは、その楽屋口の人だかりの内に、かの池内光太郎の見なれた姿が立混つていたからである。

探偵の真似をして、先方に見つけられぬ様に用心しながら、じつと見ていると、ややたつて、楽屋口から芙蓉が降りて来たが、案の定、池内は彼女を迎える様にして、立話をしてゐる。言うまでもなく、うしろに待たせた自動車にのせて、彼女をどこかへ連れて行く積りらしいのだ。

柎木愛造は、先夜の芙蓉のそぶりを見て、池内と彼女の間柄が、相当深く進んでいることを、想像はしていたけれど、目の当り彼等の親しい様子を見せつけられては、今更らの様に、烈しい嫉妬を感じないではいられなかつた。それを眺めている内に、彼の秘密好きな性癖がさせた業であつたか、咄嗟の間に、彼は池内等のあとを尾行してやろうと決心した。彼は急いで、客待ちのタクシーを傭つて、池内の車をつける様に命じた。

うしろから見てみると、池内の自動車は、尾行されてゐるとも知らず、さもお人よしに、彼の車の頭光の圏内を、グラグラとゆれていたが、暫く走る内に、こちらから見えてゐる背後のシェードが、スルスルと卸された。いつかの晩と同じである。だが、卸した人の心持は恐らく彼の場合とは、全く違つてゐるのであろうと邪推すると、彼はたまらなくいらした。――池内の車が止つたのは、築地河岸のある旅館の門前であつたが、門内に広い植込みなどのある、閑静な上品な構えで、彼等の構曳の場所としては、誠に格好の家であつた。彼等が、そういう場所として、世間に知られた家を、態と避けた心遣いが、一層小憎らしく思われた。

彼は二人が旅館へ這入つてしまふのを見届けると、車を降りて、意味もなく、その門前を行つたり来たりした。恋しさ、ねたましさ、腹立たしさに、物狂わしきまで興奮して、どうしても、このまま二人を残して帰る気がしなかつた。――一時間程も、その門前をうろつき廻つたあとで、彼は何を思つたのか、突然門内へ這入つて行つた。そして、「お馴染でなければ」と言うのを、無理に頼んで、独りでその家へ泊ることにした。

手広い旅館ではあつたが、夜も更けていたし、客も少いと見えて、陰気にひっそりとしていた。彼は当てがわれた二階の部屋に通ると、すぐ床をとらせて、横になつた。そうして、もつと夜の更けるのを待ち構えた。

階下の大時計が二時を報じた時、彼はムックリと起つて、寝間着のまま、そつと部屋を忍び出し、森閑とした広い廊下を、壁伝いに影の如くさまよつて、池内と芙蓉との部屋を尋ねるのであつた。それは非常に難儀な仕事であつたが、スリッパの脱いである、間毎の襖を、臆病な泥棒よりも、もつと用心をして、ソツと細目に開いては調べて行く内に、遂に目的の部屋を見つけ出すことが出来た。電燈は消してあつたが、まだ眠つていなかつた二

人の囁き交わす声音によって、それと悟ることが出来たのである。二人が起きていると分ると、一層用心しなければならなかった。彼は躍る胸を押えながら、少しも物音を立てない様に、襖の所へピッタリと身体をつけて、身体中を耳にした。

中の二人は、まさか、襖一重の外に、柾木愛造が立聞きしていようと、思いも及ばぬものだから、囁き声ではあったけれど、喋りたい程のことを、何の気兼ねもなく喋っていた。話の内容はさして意味のある事柄でもなかったけれど、柾木にとっては、木下芙蓉の、うちとけて、乱暴にさえ思われる言葉使いや、その懐しい鼻声を、じっと聞いているのが、実に耐え難い思いであった。

彼はそうして、室内のあらゆる物音を聞き漏らすまいと、首を曲げ、息を殺し、全身の筋肉を、木像の様にこわばらせ、真赤に充血した眼で、どことも知れぬ空間を凝視しながら、いつまでもいつまでも立ちつくしていた。

五、愛造は、「ストーカー」（尾行と立聞きと隙見の）生活に入る

それ以来、彼が殺人罪を犯したまでの約五ヶ月の間、柾木愛造の生活は、尾行と立聞きと隙見との生活であったと言っても、決して言い過ぎではなかった。その間彼は、まるで、池内と芙蓉との情交につき纏う、不気味な影の如きものであった。

凡そは想像していたのだけれど、実際二人の情交を見聞するに及んで、彼は今更らの様に、身の置きどころもない恥しさと、胸のうつろになる様な悲しさを味った。それは寧ろ肉体的な痛みでさえあった。池内の圧迫的な、けだものの様な猫撫で声には、彼は人のいない襖の外で赤面した程、烈しい羞恥を感じたし、芙蓉の、昼間の彼女からはまるで想像も出来ない、乱暴な赤裸々な言葉使いや、それでいて、その音波の一波毎に、彼の全身が総毛立つ程も懐しい、彼女の甘い声音には、彼はまぶたに溢れる熱い涙をどうすることも出来なかった。そして、ある絹ずれの音や、ある溜息の気配を耳にした時には、彼は恐怖の為に、膝から下が無感覚になって、ガクガクと震え出しさえした。

彼はたった一人で、薄暗い襖の外で、あらゆる羞恥と憤怒とを経験した。それで充分であった。若し彼が普通の人間であつたら、二度と同じ経験を繰返すことはなかったであろう。いや、寧ろ最初から、その様な犯罪者めいた立聞きなどを目論見はしなかったであろう。だが、柾木愛造は内気や人厭いで異常人であつたばかりでなく、恐らくはその外の点に於いても、例えば、秘密や罪悪に不可思議な魅力を感じる所の、あのいまわしい病癪をも、彼は心の隅に、多分に持合わせていたに相違ないのである。そして、その潜在せる邪悪なる病癪が、彼のこの異常な経験を機縁として、俄かに目覚めたものに違いないのだ。

世にもいまわしき立聞きと隙見とによって覚える所の、むず痒い羞恥、涙ぐましい憤怒、齒の根も合わぬ恐怖の感情は、不思議にも、同時に、一面に於ては、彼にとって、限りなき歓喜であり、類もあらぬ陶醉であつた。彼ははからずも覗いた世界の、あの兇暴なる魅力を、どうしても忘れることが出来なかった。

世にも奇怪な生活が始まった。柾木愛造の凡ての時間は、二人の恋人の嬉曳の場所と時とを探偵すること、あらゆる機会をのがさないで、彼等を尾行し、彼等に気づかれぬ様に立聞きし隙見することに費された。偶然にも、その頃から池内と芙蓉との情交が、一段

な恥しらずにしてみました。

彼は不様な格好で、這いつくばい、壁に鼻の頭をすりつけて、辛棒強く、小さな穴を覗き込むのだが、その向う側には、凡そ奇怪で絢爛な、地獄の覗き絵がくりひろげられていた。毒々しい五色のもやが、目もあやに、もつれ合った。ある時は、芙蓉のうなじが、眼界一杯に、つややかな白壁の様に拡がって、ドキンドキンと脈をうった。ある時は、彼女の柔かい足の裏が真正面に穴を塞いで、老人の顔に見えるその皺が、異様な笑いを笑ったりした。だが、それらのあらゆる幻惑の中で、柁木愛造を最も引きつけるものは、不思議なことに、彼女のふくらはぎに、一寸ばかり、どす黒い血をにじませた、掻き傷の痕であった。それはひよつとしたら、池内の爪がつけたものだったかも知れぬけれど、彼の目の前に異様に拡大されて蠢いていた、まぶしい程つややかな、薄桃色のふくらはぎと、その表面を無残にもかき裂いた、生々しい傷痕の醜くさが、怪しくも美しい対照を為して、彼の眼底に焼きついたのであった。

だが、彼のこの人でなしな所業は、恥と苦痛の半面に、奇怪な快感を伴っていたとは言え、それは、日一日と、気も狂わんばかりに、彼をいらだたせ、悩ましこそすれ、決して彼を満足させることはなかった。襖一重の声を聞き、眼前一尺の姿を見ながら、彼と芙蓉との間には、無限の隔りがあった。彼女の身体はそこにありながら、掴むことも、抱くことも、触れることさえ、全く不可能であった。しかも、彼にとつては永遠に不可能な事柄を、池内光太郎は、彼の眼前で、さも無雑作に、自由自在に振舞っているのだ。柁木愛造が、この世の常ならぬ、無残な苛責に耐えかねて、遂にあの恐ろしい考を抱くに至ったのは、誠に無理もないことであった。それは実に、途方もない、氣違いめいた手段ではあった。だが、それがたった一つ残された手段でもあったのだ。それを外にしては、彼は永遠に、彼の恋を成就する術はなかったのである。

六、或日、悪魔が彼の耳元にある不気味な思いつきを囁き始める

彼が尾行や立聞きを始めてから一月ばかり立った時、悪魔が彼の耳元に、ある不気味な思いつきを囁き始めたのであったが、彼はいつとなく、その甘い囁きに引入れられて行って、半月程の間に、とうとうそれを、思い帰す余地のない実際的な計画として、決心するまでになつてしまった。

ある晩、彼は久しぶりで、池内光太郎の自宅を訪問した。彼の方では、あの秘密な方法で、繁々池内に会っていたけれど、池内にしては、一月半ぶりの、やや氣拙い対面だったので、何かと氣を使って、例の巧みな弁口で、池内自身もその後芙蓉とは、まるで御無沙汰になつている体に、言いつくろうのであったが、柁木は、相手が芙蓉のことを言い出すのを待ち兼ねて、それをきっかけに、さも何気なく、「イヤ、木下芙蓉と言えば、僕は少しばかり君にすまない事をしているのだよ。ナニ、ほんの出来心なだけけれど、実はね、もう一月以上も前のことだが、芙蓉がS劇場に出ていた時分、丁度芝居がはねる時間に、あの辺を通り合わせたものだから、楽屋口で芙蓉の出て来るのを待って、僕の車にのせて、家まで送ってやったことがあるのだよ。でね、その車の中で、つい出来心で、僕はあの女に言い寄った訳なのさ。だが君、怒ることはないよ。あの女は断然はねつけたんだからね。とても僕なんかの手には合わないよ。君に内緒にして置くと、何だか僕が今でも、君とあ

の女の間柄をねたんでいる様に当って、気が済まないものだから、少し言いくかっただけで、恥しい失敗談を打あけた訳だがね。全く出来心なんだ。もうあの女に会いたくも思わぬよ。君も知っている通り、僕は真剣な恋なんて、出来ない男だからね」という様なことを喋った。なぜ、そうしなければならぬのか、彼自身にも、はつきり分らなかつたけれど、あの一事を秘密にして置いては、何だか拙い様に思われた。それをあから様に言ってしまった方が、却って安全だという気がした。

狂人というものは、健全な普通人を、一人残らず、彼等の方が却って気違いだと、思込んでいるものであるが、すると、柎木愛造が、人厭いであつたのも、彼以外の人間を、異国人の様に感じたのも、凡て、彼が最初から、幾分気違いじみていたことを、証拠立てているのかも知れない。

事実、彼は最早や気違いという外はなかつた。あの執拗で、恥知らずな尾行や立聞きや隙見なども、言うまでもなく狂気の沙汰であつた。今度は彼は、それに輪をかけた、実に途方もない事を始めたのである。と言うのは、あの人厭いな陰気者の柎木愛造が、突然、新青年の様に、隅田川の上流の、とある自動車学校に入學して、毎日欠かさずそこへ通つて、自動車の運転を練習し始めたことで、しかも、彼は、それが彼の恐ろしい計画にとつて、必然的な準備行為であると、真面目に信じていたのである。

「僕は最近、不思議なことを始めたよ。僕みたいな古風な陰気な男が、自動車の運転を習っていると云つたら、君は定めし驚くだろうね。僕の所の婆やなんか、僕が柄にもなく朝起きをして、一日も休まず自動車学校へ通學するのを見て、たまがっているよ。毎日毎日練習用のフォードのぼろ車をいじくっている内に、妙なもので、少しは骨が分つて来た。この分なら、もう一月もしたら、乙種の免状位取れ相だよ。それがうまく行つたら、僕は一台車を買込むつもりだ。そして、自分で運転して、気散じ（気晴らし）な自動車放浪をやるつもりだ。自動車放浪という気持ちだが、君は分るかね。僕にしては、実にすばらしい思いつきなんだよ。たつた一人で箱の中に座っていて、少しも人の注意を惹かないで、しかも非常な速度で自由自在に、東京中を放浪して歩くことが出来るのだ。君も知っていない様に、僕が外出嫌いなのは、この自分の身体を天日や人目にさらす感じが、たまらなくいやだからだ。車にのるにしても、運転手に物を言つたり指図をしたりしなければならぬし、僕がどこへ行くかと言うことを、少くとも運転手だけには悟られてしまうからね。それが、自分で箱車を運転すれば、誰にも知られず、丁度僕の好きな土蔵の中にとじ籠っている様な気持ちのまま、あらゆる場所をうろつき廻ることが出来る。どんな賑やかな大通りをも、雑踏をも、全く無関心な気持ちで、隠れ簀を着た仙人の様に、通行することが出来る。僕みたいな男にとつては、何と理想的な散歩法ではあるまいか。僕は今、子供の様に、乙種運転手免状が下附される日を、待ちこがれているのだよ」。

柎木はこんな意味の手紙を、池内光太郎に書いた。それは彼の犯罪準備行為を、態と大胆に曝露して、相手を油断させ、相手に疑いを抱かせまいとする、捨身の計略であつた。この場合、大胆に曝露することが、徒らに隠蔽するよりも、却って安全であることを、彼はよく知っていたのだ。無論その時分にも、一方では例の七日に一度位の、尾行と立聞きを続けていたので、彼はその手紙を受取つてからの、池内の挙動に注意したが、彼が柎木の奇行を笑う外に、何の疑う所もなかつたことは、いうまでもない。

随分金も使つたけれども、僅か二月程の練習で、彼は首尾よく乙種運転手の免状を手

入れることが出来た。同時に、彼は自動車学校の世話で、箱型フォードの中古品を買入れた。やくざなフォードを選んだのは、費用を省く意味もあったが、当時東京市中の賃自動車には、過半フォードが使用されていたので、その中に立混って、目立たぬという点が、主たる理由であった。ある理由から、彼はそれを買入れる時、客席の窓に新しくシエードを取りつけさせることを忘れなかった。前にも言った様に、彼のK町の家には、広い荒庭があったので、車庫を建てるのも、少しも面倒がなかった。

車庫が出来上ると、柁木はその扉をしめ切って、婆やに気附かれぬ様に注意しながら、二晩もかかって、大工の真似事をした。それは、彼の自動車の後部のクッションを取りはずして、その内部の空ろな部分に、板を張ったり、クッションそのものを改造したりして、そこに人一人横になれる程の、箱を作ることであった。つまり、外部からは少しも分らぬけれど、そのクッションの下に、長方形の棺桶の様な、空虚な部分が出来上った訳である。

さて、この奇妙な仕事がすむと、彼は古着屋町で、賃車の運転手が着そうな、黒の詰襟服と、スコッチの古オーバと（その時分気候は己に晩秋になっていた）目まで隠れる大きな鳥打帽とを買って来て、（か様な服装を選んだのにも、無論理由があった）それ自身につけて運転手台におさまり、時を選ばず、市中や近郊をドライブし始めたのである。

それは誠に奇妙な光景であった。雑草の生い茂った荒庭。壁のはげ落ちた土蔵。倒れかかったあばら家。くずれた土塀。その荒涼たる化物屋敷の門内から、仮令フォードの中古にもしろ、見たところ立派な自動車が、それが夜の場合には、怪獣の目玉の様な、二つの頭光を、ギラギラと光らせて、毎日毎日、どことも知れず迂り出して行くのである。婆やを初め、附近の住民達は、もうその頃は噂の拡まっていた、この奇人の、世にも突飛な行動に、目を見はらないではいられなかった。

一月ばかりの間、彼は、運転を覚えたばかりの嬉しさに、用もないのに自動車を乗り廻している、という体を装いつつ、無闇と彼の所謂自動車放浪を試みた。市内は勿論、道路の悪くない限り、近郊のあらゆる方面に遠乗りをした。ある時は、自動車を、池内光太郎の勤先の会社の玄関へ横づけにして、驚く池内を誘って宮城前の広場から、上野公園を一順して見せたこともあった。池内は「君に似合わしからぬ芸当だね。だが、フォードの古物とは気が利かないな」などと言いながら、でも、少なからず驚いている様子だった。若し彼が、現に彼の腰かけていた、クッションの下に、妙な空隙が拵えてあること、又遠からぬ将来、そこへ何物かの死体が隠されるであろうことを知ったなら、どんなに青ざめ、震え上ったことであろうと思うと、運転しながら、柁木は背中を丸くし、顔を胸に埋めて、湧上って来るニタニタ笑いを、隠さなければならなかった。

又ある晩は、たった一度ではあったけれど、彼は大胆にも、当の木下芙蓉の散歩姿を、自動車で尾行したこともあった。若しそれを、相手に見つかつたならば、彼の計画は殆ど駄目になってしまう程、実に危険な遊戯であったが、併し、危険なだけに、柁木はゾクゾクする程愉快であった。洋装の美人が、さも気取った様子で、歩道をコツコツと歩いて行く。その斜めうしろから、一台のポロ自動車が、のろのろとついて行くのだ。美人が町角を曲るたびに、ポロ自動車もそこを曲る。まるで紐でつないだ飼犬みたいな感じで、誠に滑稽な、同時に不気味な光景であった。「御令嬢、ホラ、うしろから、あなたの棺桶が同伴をしていますよ」と、柁木はそんな歌を心の中で呟いて、薄気味の悪い微笑を浮かべながら、ソロソロと車を運転するのであった。

彼がこんな風に、自動車を手に入れてから、一月もの長い間、辛抱強く無駄な日を送っていたのは、言うまでもなく、池内を初め婆やだとか近隣の人達に彼の真意を悟られまい為であった。彼が自動車を買ったかと思うと、すぐ様芙蓉が殺されたのでは、少々危険だと考えたのである。だが、これは寧ろ杞憂であったかも知れない。何故と言つて、表面に現われた所では、柁木と芙蓉とは、ただ小学校で顔見知りであった男女が、偶然十数年ぶりに再会して、三四度席を同じうしたまでに過ぎないし、それからでも、已に五ヶ月の月日が経過しているのだから、柁木が自動車を買入れた日と、芙蓉が殺害された日と、仮令ピッタリ一致したところで、この二つの事柄の間に、恐ろしい因果関係が存在しようなどと、誰が想像し得たであろう。どんなに早まったところで、彼には少しの危険さえなかつた筈である。

それは兎も角、流石用心深い柁木も、一ヶ月の間の、さも呑気そうな自動車放浪で、最早や充分だと思つた。愈々実行である。だが、その前に準備して置かねばならぬ、二三のこまごました仕事、まだ残つていた。と言ふのは、賃自動車の目印である、ツーリングの赤いマークを印刷した紙切れを手に入れること、自動車番号を記したテイルの塗り板の替え玉を用意すること、芙蓉の為に安全な墓場を準備して置くことなどであったが、前の二つは大した困難もなく揃えることが出来たし、墓場についても、実に申分のない方法があった。彼は邸の荒庭の真中に、水のかれた深い古井戸のあることを知つていた。ある日彼は、庭をぶらついていて、態とそこへ足を這らせ、向脛に一寸した傷を拵えて見せた。そして、その事を婆やに告げて、危いから埋めることにしようと言ひ出したのである。丁度その頃、近くに道路工事があつて、不用の土を運ぶ馬力が、毎日彼の邸の前を通り、工事の現場には、「土御入用の方は申出て下さい」と立札がしてあつた。柁木はその工事監督に頼んで、代金を払つて、二車ばかりの土を、彼の邸内へ運んで貰うことにしたのである。馬方は、彼の荒庭の中へ馬車を引き込んで、その片隅へ、乱暴に土の山を作つて行つた。あとは、いつでも好きな時に、人足を頼んで、その土を古井戸の中へほうり込んで貰えばよいのである。言うまでもなく、彼は井戸を埋める前に芙蓉の死骸をその底へ投込み、上から少々土をかけて、人足だちに氣附かれることなく、彼女を葬つてやる積りであつた。

さて、準備は遺漏（手落ち）なくととのつた。もう決行の日を極めるばかりである。それについても、彼は確かな目算があつた。というのは、屢々述べた様に、彼は其の時分までも、例の尾行や立聞きを続けていたので、彼等（池内と芙蓉と）が次に出会う場所も時間も、知れていたし、当時芝居の切れ目だったので、芙蓉は自宅から約束の場所へ出かけるのだが、そんな時に限つて、彼女は態と帳場の車を避け、極まった様に、近くのある大通りの角まで歩いて、そこで通りすがりのタクシーを拾うことさえ、彼にはすっかり分つていた。実言うと、それが分つていたからこそ、彼はあの變てこな、自動車のトリックを思いついた程であつたのだから。

七、主人公愛造は、終にその悪魔の計画を実行に移すことになる

十一月のある一日、その日は朝から清々しく晴れ渡つて、高台の窓からは、富士山の頭が、ハッキリ眺められる様な日和であつたが、夜に入つても、肌寒いそよ風が渡つて、空

には梨地の星が、異様に鮮やかにきらめいていた。

その夜の七時頃、榎木愛造の自動車は、二つの目玉を歓喜に輝かせ、爆音華やかに、彼の化物屋敷の門を迂り出し、人なき隅田堤を、吾妻橋の方角へと、一文字に快走した。運転台の榎木愛造も、軽やかにハンドルを握り、彼に似合わしからぬ口笛さえ吹き鳴らして、さもいそいそと嬉し相に見えた。

何という晴々とした夜、何という快活な彼のそぶり。あの恐ろしい犯罪への首途としては、余りにも似合わしからぬ陽気さではなかったか。だが、榎木の気持では、陰惨な人殺しに行くのではなくて、今彼は、十幾年も待ちこがれた、あこがれの花嫁御を、お迎いにしかけるのだった。今夜こそ、嘗つては彼の神様であった木下文子が、幾夜の夢に耐え難きまで彼を悩まし苦しめた木下芙蓉の肉体が、完全に彼の所有に帰するのだ。何人も、あの池内光太郎でさえも、これを妨げる力はないのだ。アア、この歓喜を何に例えることが出来よう。透通った闇夜も、闌干たる星空も、自動車の風よけガラスの間から、彼の頬にざれかかるそよ風も、彼の世の常ならぬ結婚の首途を祝福するものでなくて何であろう。

木下芙蓉の、その夜の嬌曳の時間は八時ということであったから、榎木は七時半には、もうちゃんと、いつも芙蓉が自動車を拾う、大通りの四つ角に、車を止めて待構えていた。彼は運転台で、背を丸くし、烏打帽をまぶかにして、うらぶれた辻待ちタクシ一の運転手を装った。前面の風よけガラスには、ツーリングの赤いマークのはいった紙を目立つ様に張り出し、テイルの番号標は、いつの間にか、警察から下附されたものとは、まるで違う番号の、営業自動車用のにせ物に代っていた。それは誰が見ても、ありふれたフォードの、客待ち自動車でしかなかった。

「ひよつとしたら、今夜は何か差支えが出来て、約束を変えたのではあるまいか」、待遠しさに、榎木がふとそんなことを考えた時、丁度それが合図でもあった様に、向うの町角から、ひよつこりと、芙蓉の和服姿が現われた。彼女は、態と地味な拵えにして、茶っばい袷に黒の羽織、黒いシヨールで、顎を隠して、小走りに彼の方へ近づいて来るのだが、街燈の作りなした影であったか、顔色も、どことなく打沈んで見えた。

丁度その時は、通り過ぎる空自動車もなかったの、彼女は当然榎木の車に走り寄った。いうまでもなく、榎木の偽瞞が効を奏して、彼女はその車を、辻待ちタクシーと思いついていたのである。「築地まで、築地三丁目の停留場のそばよ」、榎木が運転台から降りもせず、顔をそむけたまま、うしろ手にあけた扉から、彼女は大急ぎで迂り込んで、彼の背中へ行先を告げるのであった。

榎木は、心の内で凱歌を奏しながら、猫背になって命ぜられた方角へ、車を走らせた。淋しい町を幾曲りして、車は順路として、ある明るい、夜店で賑っている、繁華な大通りへさしかかったが、この大通りこそ、榎木の計画にとって、最も大切な場所であった。彼は運転しながら、鳥打のひさしの下から、上目使いに、前の風よけガラスに映る、背後の客席の窓を見つめていた。今か今かと、ある事の起るのを待構えていた。

すると間もなく、案の定まぶしい燈光をさける為に、半年以前、榎木と同乗した時と同じ様に、芙蓉が客席の四方の窓のシェードを、一つ一つ卸して行くのが見えた。(当時の箱型フォードは凡て、客席と運転手台との間に、ガラス戸の隔てが出来ていた) 彼が自動車を買入れた時、態々シェードを取りつけさせた理由は、これであった。榎木は、胸の中で小さな動物が、滅茶苦茶にあれば廻っている様に感じた。一里も走りつづけた程喉が乾

いて、舌が木の様にこわばってしまった。だが、彼は断末魔の苦しみで、それを堪えながら、なおも走らせるのであった。

賑かな大通りの中程へ進んだころ、前方から気違いめいた音楽が聞えて来た。それはその町のある空地に、大テントを張って興業していた、娘曲馬団の客寄せ楽隊で、旧式な田舎音楽が、蛮声を張り上げて、かっぱれの曲を、滅多無性に吹き鳴らしているのがあった。曲馬団の前は、黒山の人だかりが、人道を埋め、車道は雷の様な音を立てて行交う電車や、自動車、自転車で、急流を為し、耳を聳する音楽と、目をくらす雑踏が、その辺一帯の通行者から、あらゆる注意力を奪ってしまったかに見えた。柾木が予期した通り、これこそ屈強の犯罪舞台であった。

彼は車道の片側へ車を寄せて、突然停車すると、目に見えぬ早さで、運転台を飛び降り、客席に躍り込んで、ピツシャリと中から扉をしめた。そこは丁度露店の焼鳥屋のうしろだったし、仮令見た人があったところで、完全にシェードが下りているのだから、客席内の様子に気づく筈はなかった。

躍り込むと同時に、彼は芙蓉の喉を目がけて飛びついて行った。彼の両手の間で、白い柔いものが、しなしなと動いた。「許して下さい。許して下さい。僕はあなたが可愛いのだ。生かして置けない程可愛いのだ」、彼はそんな世迷い言を叫びながら、白い柔いものを、くびれて切れてしまう程、ぐんぐんとしめつけて行った。

芙蓉は、運転手だと思込んでいた男が、気遣いの様に血相をかえて飛び込んで来た時、殺される者のす早い思考力で、咄嗟に柾木を認めた。だが、彼女は、悪夢の中での様に、全身がしびれ、舌が釣って、逃げ出す力も、助けを呼ぶ力もなかった。妙なことだけれど、彼女は大きく開いた目で、またたきもせず柾木の顔を見つめ、泣き笑いの様な表情をして、さあここをと言わぬばかりに、彼女の首をグツと彼の方へつき出したかとさえ思われた。

柾木は必要以上に長い間、相手の首をしめつけていた。離そうにも、指が無感覚になっってしまった、言うことを聞かなかったし、そうでなくても、手を離したら、ビチビチ躍り出すのではないかと、安心が出来なんだ。だが、いつまで押えつけている訳にも行かぬので、怖る怖る手を離して見ると、被害者はくらげの様に、グニャグニャと、自動車の底へ、くずおれてしまった。

彼はクッションを取りはずし、難儀をして、芙蓉の死骸を、その下の空ろな箱の中へおさめ、元通りクッションをはめて、その上にぐったり腰をおろすと、気をしずめる為に、暫くの間、じっとしていた。外には、相変らず、かっぱれの楽隊が、勇ましく鳴り響いていたが、それが実は、彼をだます為に、態と何気なく続けられているので、安心をして、シェードをあげると、窓ガラスの外に、無数の顔が折り重なって、千の目で、彼を覗き込んでいるのではないかと思われ、迂濶にシェードを上げられない様な気がした。

彼は一分位の幕の隙間から、おぞおぞと外を覗いて見た。だが、安心したことには、そこには彼を見つめている一つの顔もなかった。電車も自転車も歩行者も、彼の自動車などには、全然無関心に、いそがしく通り過ぎて行った。

大丈夫だと思うと、少し正気づいて、乱れた服装をととのえたり、隠し残したものはないかと、車の中を改めたりした。すると床のゴムの敷物の隅に、小さな手提鞆が落ちていたのに気づいた。無論芙蓉の持物である。開いて見ると、別段の品物も入っていないが、中に銀の懐中鏡があったので、序にそれを取り出して、自分の顔を写して見た。

丸い鏡の中には、少し青ざめていたけれど、別に悪魔の形相も現われていなかった。彼は長い間鏡を見つめて、顔色をととのえ、呼吸を静める努力をした。やがて、やや平静を取戻した彼は、いきなり運転台に飛び戻って、大急ぎで電車を横切り、車を反対の方向に走らせた。そして、人通りのない淋しい町へ淋しい町へと走って、とある神社の前で車を止め、前後に人のいないのを確かめると、ヘッドライトを消して置いて、咄嗟の間に、シールドを上げ、ツーリングのマークをはがし、テイルの番号標を元の本物と取り換え、再び頭光をつけると、今度はすっかり落ちついた気持で、車を家路へと走らせるのであった。交番の前を通る度に、態と徐行して、「お巡りさん、私や人殺しなんですよ。このうしろのクッションの下には、美しい女の死骸が隠してあるんですよ」などと独ごちて、ひどく得意を感じさせした。

八、家に到着し、その芙蓉の死骸を土蔵の中に運び入れる

邸について、車を車庫に納めると、もう一度身の廻りを点検して、シャンとして玄関へ上り、大声に台所の婆やを呼び出した。「お前済まないが、一寸使いに行つて来ておくれ。浅草の雷門の所に、〇〇という洋酒屋があるだろう。あそこへ行つてね、何でもいいから、これだけ買えるだけの上等の葡萄酒を一本取つてくるのだ。サア、ここにおあしがある」。そういつて、彼が十円札を二枚つき出すと、婆やは、彼の下戸を知っているのだから、「マア、お酒でございますか」と妙な顔をした。柎木は機嫌よくニコニコして「ナニ、一寸ね、今晚は嬉しいことがあるんだよ」と弁解したが、これは、婆やが雷門まで往復する間に、芙蓉の死骸を、土蔵の二階へ運ぶ為でもあったけれど、同時に又、この不可思議な結婚式の心祝いに、少々お酒がほしかったのもあった。

婆やの留守の三十分ばかりの間に、彼は魂のない花嫁を、土蔵の二階へ運んだ上、例の自動車のクッションの下の仕掛けを、すっかり取りはずして、元々通りに直して置く暇さえあった。こうして彼は、最後の証拠を埋滅してしまった訳である。

この上は、あかぎの土蔵へ闖入して、芙蓉の死骸そのものを目撃しない以上、誰一人彼を疑い得る者はない筈であった。

間もなく半ば狂せる柎木と、木下芙蓉の死体とが、土蔵の二階でさし向いであった。燭台のたった一本の蠟燭が、赤茶けた光で、そこに恥もなく横たわった、花嫁御の冷たい裸身を照らし出し、それが、部屋の一方に飾つてある、等身大の木彫りの菩薩像や、青ざめたお能の面と、一種異様の、陰惨な、甘酸っぱい対照を為していた。

たった一時間前まで、心持の上では、千里も遠くにいて、寧ろ怖いものでさえあった、世間並に意地悪で、利口者の人気女優が、今何の抵抗力もなく、赤裸々のむくろを、彼の眼前一尺に曝しているかと思うと、柎木は不思議な感じがした。全く不可能な事柄が、突然夢の様に実現した気持であった。今度は反対に、軽蔑したり、憐んだりするのは、彼の方であった。手を握るはおろか、頬をつついて、抱きしめても、抛り出しても、相手はいつかの晩の様に、彼を笑うことも、嘲けることも出来ないのだ。何たる驚異であろう。幼年時代には彼の神様であり、この半年の間は、物狂おしきあこがれの的であった木下芙蓉が、今や全く彼の占有に帰したのである。

死体は、首に青黒い絞殺のあとがついているのと、皮膚の色がやや青ざめていた外は、

生前と何の変わりもなかった。大きく見開いた、瀬戸物の様なうつろな目が、空間を見つめ、だらしなく開いた唇の間から、美しい齒並と舌の先が覗いていた。唇に生色がなくて、何とやら花やしきの生人形みたいであったが、それ故に、却って（十二字削除）皮膚は青白くすべっこかった。仔細に見れば、二の腕や腿のあたりに生毛も生えていたし、毛穴も見えたけれど、それにも拘らず、全体の感じは、すべっこくて、透通っていた。

非現実的な蠟燭の光が、身体全体に、無数の柔い影を作った。胸から腹の表面は、砂漠の、砂丘の写真の様に、蔭ひなたが、雄大なるうねりを為し、身体全体は、夕日を受けた奇妙な白い山脈の様に見えた。気高く聳えた嶺続きの、不可思議な曲線、滑かな深い谷間の神秘なる蔭影、柁木愛造はそこに、芙蓉の肉体のあらゆる細部に互って、思いもよらぬ、微妙な美と秘密とを見た。

生きている時は、人間はどんなにじっとしていても、どこやら動きの感じを免れないものだが、死者には全くそれがない。このほんの僅かの差違が、生体と死体とを、まるで感じの違ったものに見せることは、恐ろしかった。芙蓉はあくまでも沈黙していた。あくまでも静止していた。だらしのない姿を曝しながら、叱りつけられた小娘の様に、いじらしい程おとなしかった。

柁木は彼女の手を取って、膝の上で弄びながら、じっとその顔に見入った。強直の来ぬ前であったから、手はくらの様にぐにやぐにやして、その癖非常な重さだった。皮膚はまだ、日向水位の温度を保っていた。「文子さん、あなたはとうとう僕のものになりましたね。あなたの魂が、いくらあの世で意地悪を言ったり、嘲笑ったりしても、僕は何ともありませんよ。なぜって、僕は現にこうして、あなたの身体そのものを自由にしてるのですからね。そして、あなたの魂の方の声や表情は、聞えもしなければ、見えもしないのですからね」。

柁木が話しかけても、死骸は生人形みたいに黙り返っていた。空ろな目が、霞のかかった様に、白っぽくて、白眼の隅の方に、目立たぬ程、灰色のポツポツが見えていた。（そのれの恐ろしい意味を、柁木はまだ気づかなかったけれど）顎がひどく落ちて、口があくびをした様に見えるのが、少し気の毒だったので、彼は手で、それをグツと押し上げてやった。押し上げても、押し上げても、元に戻るものだから、口を塞いでしまうのに、長い間かかった。でも、塞いだ口は、一層生前に近くなって、厚ぼったい花弁の重なり合った様な恰好が、いとしく、好ましかった。可愛らしい小鼻がいきんだ様に開いて、その肉が美しく透通って見えるのも、言い難き魅力であった。

「僕達はこの広い世の中で、たった二人ぼつちなんです。誰も相手にしてくれない、のけ者なんです。僕は人に顔を見られるのも恐ろしい、人殺しの大罪人だし、あなたは、そう、あなたは死びとですからね。私達はこの土蔵の厚い壁の中に、人目をさけて、ひそひそと話をしたり、顔を眺め合っているばかりですよ。淋しいですか。あなたはあんな華やかな生活をしてた人だから、これでは、あんまり淋し過ぎるかも知れませんね」。

彼はそんな風に、死骸と話し続けながら、ふと古い古い記憶を呼び起していた。田舎風の、古めかしく陰気な、八畳の茶の間の片隅に、内気な弱々しい子供が、積木のおもちゃで、彼のまわりに切れ目のない垣を作り、その中にチンと坐って、女の子の様に人形を抱いて、涙ぐんで、そのお人形と話をしたり、頬ずりをしたりしている光景である。言うまでもなく、それは柁木愛造の六七才の頃の姿であったが、その折の内気な青白い少年が、大きく

幾度も通ったりした。ある町に氷と書いた旗の出ている家があったので、彼はそこで車を降りて、ツカツカと家の中へ這入って行った。店の間に青ペンキを塗った大きな氷室が出来ていた。「もし、もし」と声をかけると、奥から四十ばかりのお神さんが出て来て、彼の顔をジロジロと眺めた。「氷をくれませんか」と言うと、お神さんは面倒臭そうな風で、「いか程」と訊いた。無論彼女は病人用の氷の積りでいるのだ。

「アノ、頭を冷すんですから、沢山は入りません。少しばかり分けて下さい」、内気の虫が、彼の言葉を、途中で横取りして、まるで違ったものに翻譯してしまった。

縄でからげて貰った小さな氷を持って、車に乗ると、彼は又当てもなく運転を続けた。運転台の床で氷がとけて、彼の靴の底をベトベトにぬらした時分、彼は一軒の大きな酒屋の前を通りかかって、その店に三尺四方位の上蓋の箱に、鹽が一杯に盛り上っているのを発見すると、又車を降りて、店先に立った。だが、不思議な事に、彼はそこで鹽を買う代りに、コップに一杯酒をついで貰って、車を止めたのはそれが目的でもあったかの様に、グイとおおった。

何の為に車を走らせているのか、分らなくなってしまった。ただ、何かにウオーウオーと追駈けられる気持で、せかせかと町から町を走り廻った。呑みつけぬ酒の為に、顔がかつかとほてって、肌寒い気候なのに、額にはビッシヨリ汗の玉が発疹した。そんなでいて、併し、頭の中の、彼の屋敷の方角に当る片隅には、絶えず芙蓉の死体が鮮かに横わっていた。そして、その幻影のクッキリと白い裸体が、焼け焦げが拡がる様に、刻々に蝕まれて行くのが、見えていた。「こうしてはいられない。こうしてはいられない」、彼の耳元で、ブツブツブツブツそんな呟きが聞えた。

無意味な運転を二時間余り続けた頃、ガソリンが切れて、車が動かなくなった。しかも、それが丁度ガソリン販売所のない様な町だったので、車を降りてその店を探し廻り、バケツで油を運搬するのに、悲惨な程間の抜けた無駄骨折りをしなければならなかった。そして、やっと車が動く様になった時、彼は始めて気附いた様に「ハテ、俺は何をしていたのだっけ」と暫く考えていたが、「アアそうだ。俺は朝飯をたべていないのだ。婆やが待っているだろう。早く帰らなければ」と気がついた。彼は側に立止って彼の方を見ていた小僧さんに道を訊いて、家の方角へと車を走らせた。三十分もかかって、やっと吾妻橋へ出たが、その時また、彼自身のやっていることに不審を抱いた。「御飯」のことなどどつくに忘れていたので、車を徐行させて、ボンヤリ考え込まなければならなかった。だが、今度は意外にも、天啓の様にすばらしい考えがひらめいた。「チエツ、俺はさっきから、なぜそこへ気がつかなかつたらう」、彼は腹立たしげに呟いて、併し晴々した表情になって、車の方向を変えた。行先は本郷の大病院わきの、ある医療器械店であった。

白く塗った鉄製の棚だとか、チカチカ光る銀色の器械だとか、皮を剥いた赤や青の毒々しい人体模型だとか、薄気味悪い品物で埋まっている、広い店の前で、彼は暫く躊躇していたが、やがて影法師みたいにフラフラとそこへ這入って行くと、一人の若い店員を捉えて、何の前置きもなく、いきなりこんなことを言った。

「ポンプを下さい。ホラ、あの死体防腐用の、動脈へ防腐液を注射する、あの注射ポンプだよ。あれを一つ売って下さい」、彼は相当ハッキリ口を利いたつもりなのに、店員は「へ?」と言って、不思議相に彼の顔をジロジロ眺めた。彼は、今度は顔を真赤にして、もう一度同じことを繰返した。「存じませぬね、そんなポンプ」、店員はボロ運転手みた

骸とは言え、どこかに反撥力が残っていて、(九字削除) 無生物という気持がしなかったのに、今見ると、彼女は全くグツタリと、身も心も投げ出した形で、やっと固形を保った、重い液体の一塊の様に、横わっていた。触って見ると、肉が豆腐みたいに柔くて、既に死後強直が解けていることが分った。だが、そんなことよりも、もっと彼を撃つたのは、芙蓉の全身に現われた、おびただしい屍斑であった。不規則な円形を為した、鉛色の紋々が、まるで奇怪な模様みたいに、彼女の身体中を覆っていた。

幾億とも知れぬ極微なる蟲共は、いつ殖えるともなく、いつ動くともなく、まるで時計の針の様に正確に、着々と彼等の領土を侵蝕して行つた。彼等の極微に比して、その侵蝕力は、実に驚くべき速さだった。しかも、人は彼等の暴力を目前に眺めながら、どうする事も出来ぬのだ。手をつかねて傍観する外はないのだ。一度恋人を葬る機会を失したばかりに、生体に幾倍する死体の魅力を知り初め、痛ましくも地獄の恋に陥つた柁木愛造は、その代償として、彼の目の前で、いとしい恋人の五体が戦慄すべき極微物の為に、徐々にしかも間違ひなく、蝕まれて行く姿を、拱手して見守らなければならなかった。恋人の為に死力を尽して戦いたいのだ。だが、彼等の恐るべき作業はまざまざと目に見えていながら、しかも、戦うべき相手がないのだ。嘗てこの世に、これほどの大苦痛が存在したであらうか。

彼は追い立てられる様な気持で、昨日失敗した防腐法を、もう一度繰返すことを考えて見たが、考えるまでもなく駄目なことは分り切っていた。防腐液の注射は無論彼の力に及ばぬし、氷や鹽を用いる方法も、そのかさばった材料を運び入れる困難があった外に、何となく彼と恋人とを隔離する感じが、いやであった。そして、仮令どんな方法をとって見た所で、幾分分解作用をおくらすことは出来ても、結局それを完全に防ぎ得るものでないことが、彼にもよく分っていた。彼の慌だしい頭の中に巨大な真空のガラス瓶だとか、死体の花氷だとかの、荒唐無稽な幻影が浮んでは消えて行つた。製氷会社の薄暗い冷蔵庫の中で、技師に嘲笑されている彼自身の姿さえ、空想された。

だがあきらめる気にはなれななんだ。(以下三行削除)、「アア、そうだ。死骸にお化粧をしてやろう。せめて、うわべだけでも塗りつぶして、恐ろしい蟲共の拡がって行くのを見えない様にしよう」、考えあぐんだ彼は、遂にそんなことを思立った。あきらめの悪い姑息な方法には相違なかつたけれど、彼の不思議な恋を一分でも長く楽しむ為には、この様な一時のがれをでも試みる外はなかつた。

彼は大急ぎで町に出て、胡粉と刷毛とを買って帰り(これらの異様な挙動を、婆やはさして怪しまなんだ。彼の不規則な生活や、奇矯な行為には、慣れっこになっていたからだ。彼女はただ土蔵から出て来た柁木の身辺に、病院へ行つたような、ひどい防腐剤の匂の漂っていたのを、いささか不審に思った)別の洗面器にそれを溶いて、人形師が生人形の仕上げでもする様に、芙蓉の全身を塗りつぶした。そして、不気味な屍斑が見えなくなると、今度は、普通の絵の具で、役者の顔をする様に、目の下をピンク色にぼかして見たり、眉を引いて見たり、唇に紅を塗って見たり、耳たぶを染めて見たり、その他五体のあらゆる部分に、思うままの色彩をほどこすのであった。この仕事に彼はたっぷり半日もかかった。最初はただ屍斑や陰気な皮膚の色を隠すのが目的であったが、やっている内に、屍の粉飾そのものに異常に興味を覚え始めた。彼は、死体というキャンヴァスに向つて、妖艶なる裸像を描く、世にも不思議な画家となり、様々な愛の言葉を囁きながら、興に乗

じては冷いキャンヴァスに口づけをさえしなから夢中になって絵筆を運ぶのであった。

やがて出来上った彩色された死体は、妙なことに、彼が嘗つてS劇場で見た、サロメの舞台姿に酷似していた。生地芙蓉も美しかったけれど、全身に毒々しく化粧をした芙蓉は、一層生前のその人にふさわしくて、言い難き魅力を備えていた。蝕まれて、最早や取返す術もなく思われた、芙蓉のむくろに、この様な生気が残っていたことは、しかもそれが生前の姿にもまして悩ましき魅力を持つていたことは、柁木にとつて寧ろ驚異であった。

それから三日ばかりの間、死体に大きな変化もなかったので、柁木は、日に三度食事に降りて来る外は、全く土蔵にとじ籠つて、せっぱつまつた最後の恋に、明日なき恋人のむくろとさし向いで、氣違の様に、泣きわめき、笑い狂つた。彼には、それがこの世の終りとも感じられたのである。

その間に、一つだけ、少し変わった出来事があった。ある午後、粉飾せる死体のそばで、疲れ切つて泥の様に眠つていた柁木は、婆やが土蔵の入口の所で引いている、呼鈴代りの鳴子の音に目を覚ました。それは来客の時に限つて使用することになつていたので、彼は若しや犯罪が発覚したのではないかと、ギョツとして、飛び起ると、芙蓉の死骸に頭から蒲団をかぶせて置いて、ソツと階段を降り、入口の所で暫く耳をすましていたが、思い切つて厚い扉を開けた。すると、そこにはやつぱり婆やが立っていて、「旦那様、池内様がお出いでなさいました」と告げた。彼は池内と聞いてホツとしたが、次の瞬間、「アア、奴めとうとう俺を疑い始め、様子をさぐりに来たんだな」と考えた。「いると言つたのかい」と聞くと、婆やは悪かつたのかとオドオドして「ハイ、そう申しましたが」と答えた。彼は咄嗟に心をきめて「構わないから、探して見たけれどいないから、多分知らぬ間に外出したのだろうと言つて、返して下さい。それからね。当分誰が来ても、僕はいない様になつて置くのだよ」と命じて、そのまま扉を締めた。

だが、時がたつに従つて、池内に会わなかつたことが、悔まれて来た。勇気を出して会いさえすれば、一か八か様子が分つて、却つて気持が落ちついたであろうに、なまじ逃げた為に、池内の心をはかり兼ねて、いつまでも不安が残つた。静かな土蔵の二階で、黙りこくつた死骸を前にして、じつと考へていると、その不安がジリジリとお化けの様に大きくなり、身動きも出来ない程の恐怖に襲われて来、彼はその恐怖を打消す為めだけでも、居続けの遊蕩児の様な、焼くそな氣持で、ガラガラと毒々しい着色死体を物狂おしく愛撫した。

十二、やがて食事に降りて来ぬ開かずの蔵の扉を開けて見ると

三日ばかり小康が続いたあとには、恐ろしい破綻が待ち受けていた。その間死体に別段の変化が現われなかつたばかりでなく、不思議なお化粧の為とは言え、彼女の肉体が前例なき程妖艶に見えたというのは、例えば消える前の蠟燭が、一時異様に明るく照り輝く様なものであった。いまわしき蟲共は、表面平穩を装いながら、その実死体の内部に於て、幾億の極微なる吻を揃え、ムチムチと、五臓を蝕み尽しているのであった。

ある日、長い眠りから目覚めた柁木は、芙蓉の死体に非常な変化が起つてのを見て、余りの恐ろしさに、あやうく叫び出す所であつた。

そこには、最早や昨日までの美しい恋人の姿はなくて、女角力の様な白い巨人が横わっていた。身体がゴム鞠の様にふくれた為に、お化粧の胡粉が相馬焼みたいに、無数の〇〇〇〇〇〇〇、網目の間から、褐色の肌が気味悪く覗いていた。顔も巨大な赤ん坊の様にあどけなくふくれ上って、空ろな目から、半開の唇から、(十九字削除) 柁木は嘗つてこの死体膨脹の現象について記載されたものを読んだことがあった。目に見えぬ極微な有機物は、群をなして腸腺を貫き、之を破壊して血管と腹膜に侵入し、そこに瓦斯を発生して、組織を液体化する醗酵素を分泌するのだが、この発生瓦斯の膨脹力は驚くべきものであつて、死体の外貌を巨人と変えるばかりでなく、横隔膜を第三肋骨の辺まで押し上げる力を持っている。同時に体内深くの血液を、皮膚の表面に押し出し、彼の吸血鬼の伝説を生んだ所の、死後循環の奇現象を起すことがある。

遂に最後が来たのだ。死体が極度まで膨脹すれば次に来るものは分解である。皮膚も筋肉も液体となつて、ドロドロ流れ出すのだ。柁木はおどかされた幼児の様に、大きなうるんだ目で、キョロキョロとあたりを見廻し、今にも泣き出し相に、キュッと顔をしかめた。そして、そのままの表情で、長い間じっとしていた。

暫くすると、彼は突然何か思出した様子で、ピヨコンと立上ると、せかせか本棚の前へ行って、一冊の古ぼけた書物を探し出した。背皮に「木乃伊」と記されていた。そんなものが今更何の役にも立たぬ事は分り切っていたにも拘らず、命をかけた恋人が、刻々に蝕まれて行くいらだたしさに、物狂わしくなっていた彼は、熱心にその書物の頁をくつて、とうとう次の様な一節を発見した。

「最も高価なる木乃伊の製法左の如し。先ず左側の肋骨の下を深く切断し、其傷口より内臓を悉く引き出し、唯心臓と腎臓とを残す。又、曲れる鉄の道具を鼻口より挿入して、脳髓を残りなく取出し、かくして空虚となれる頭蓋と胴体を棕櫚酒にて洗浄、頭蓋には鼻孔より没薬等の薬剤を注入し、腹腔には乾葡萄酒を填充し、傷口を縫合す。かくして、身体を七十日間曹達水に浸したる後、之を取出し、護謨にて接合せる麻布を以つて綿密に包巻するなり」。

彼は幾度も同じ部分を読返していたが、やがて、ポイとその本を放り出したかと思うと、頭のうしろをコツコツと叩きながら、空目をして、何事か胸忘れた人の様に、「なんだっけなあ、なんだっけなあ、なんだっけなあ」と呟いた。そして、何を思ったのか、突然階段をかけ降り、非常な急用でも出来た体で、そそくさと玄関を降りるのであった。

門を出ると、彼は隅田堤を、何ということもなく、急ぎ足で歩いて行った。大川の濁水が、ウジャウジャと重なり合つた無数の虫の流れに見えた。行手の大地が、匍匐する微生物で、覆い隠され、足の踏みどもない様に感じられた。「どうしよう、どうしようなあ」、彼は歩きながら、幾度も幾度も、心の苦悶を声に出した。或る時は、「助けてくれエ」と大声に叫び相になるのを、やっと喉の所で喰い止めねばならなかった。

どこをどれ程歩いたのか、彼には少しも分らなただけれど、三十分も歩き続けた頃、余りに心の内側ばかりを見つめていたので、つい爪先がお留守になり、小さな石につまずいて、彼はバツタリ倒れてしまった。痛みなどは感じもしなかつたが、その時ふと彼の心に奇妙な変化が起つた。彼は立上る代りに、一層身を低く土の上に這いつくばって、誰にともなく、非常に叮嚀なおじぎをした。

変な男が、往來の真中で、いつまでもおじぎをしているものだから、たちまち人だから

になり、通りがかりの警官の目にも止った。それは親切な警官であったから、彼を助け起して、住所を聞き、気遣いでも思ったのか、態々吾妻橋の所まで送り届けてくれたが、警官と連れ立って歩きながら、榎木は妙なことを口走った。

「お巡りさん。近頃残酷な人殺しがあつたのを御存じですか。何故残酷だといえますかね。殺された女は、天使の様に清らかで、何の罪もなかったのです。と言って、殺した男も人好しの善人だったので。変です。それはそうと、私はその女の死骸のある所をちゃんと知っているのですよ。教えて上げましょうか。教えて上げましょうか」、だが、彼がいくらそのことを繰返しても、警官は笑うばかりで、てんで取合おうともしなかったのである。

*

*

それから数日の後、榎木がまる二日間食事に降りて来ないので、婆やが心配をして家主に知らせ、家主から警察に届出で、あかすの蔵の扉は、警官達の手によって破壊された。薄暗い土蔵の二階には（むせ返る死臭と、おびただしい蛆虫の中に）二つの死骸が転っていた。その一人は直ぐ主人公の榎木愛造と判明したけれど、もう一人の方が、行衛不明を伝えられた、人気女優木下芙蓉の、なれの果てであることを確めるには、長い時間を要した。何故と言って、彼女の死体は殆ど腐敗していた上に、腹部が無残に傷つけられ、腐りただれた内臓が醜く露出していた程であつたから。榎木愛造は（芙蓉の死毒によつて命を奪われたとの判定であつた）露出した芙蓉の腹わたの中へ、うつぶしに顔を突込んで死んでいたが、恐ろしいことには、彼の醜く歪んだ、断末魔の指先が、恋人の脇腹の腐肉に、執念深く喰い入っていた。（一元）

*

*

「参考文献」

※底本「蟲」江戸川乱歩著（「青空文庫」）